

シャクヤクのさし木繁殖と繁殖株利用法の開発

第2報 株の増殖経過について

有野 賢三・水越 洋三・畠山 順三

(秋田県農業試験場)

Propagation by Leaf-Bud Cutting and Development of
the Method by Utilizing of Rootingstocks in Peony

2. Propagation process of Rootingstocks

Kenzo ARINO, Yozo MIZUKOSHI and Junzo HATAKEYAMA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 ま え が き

シャクヤクは、本県のような冷涼地において、品質の優れた切花生産が可能ことから、その特産化が望まれている。

本来、シャクヤクの繁殖は、株分けによる栄養繁殖が主体となってきたが、この方法では繁殖効率が低く、また、線虫が持ち込まれるため、急速に生産力並びに品質の低下をきたす。

これらの問題を解決するために、株分け繁殖にかわる全く新しいさし木による繁殖技術と増殖株の利用法を開発する目的で、一連の試験を行っている。前報で、節位別の繁殖性能について検討し、クラウンの形成には、採穂部位として低節位がよく、さし木はできるだけ早期(4月)に行うことが良いことを明らかにしている。本報では、繁殖株の増殖経過について報告する。

2 試験方法

試験① さし木の置床期間に関する試験

さし木時期：昭和55年6月5日。置床期間：30日、45日、60日。供試節位：下位から第1・2節。茎の種類：摘蕾茎。供試株：露地養成株。

試験② クラウンの形成経過並びに増殖経過について

さし木時期：4月18日(早期ざし)、6月9日(晚期ざし)。供試株：促成株(4月18日ざし)、露地養成株(6月9日ざし)。茎の種類：摘蕾茎。供試節位：第2節。

①～②共通……さし木方法の種類：葉芽ざし。供試品種：サラベルナル。さし木培地：山砂。発根促進剤：IBA 0.5% 粉剤(粉衣処理)。材料は鉢上げ後、露地で管理し、9月下旬に温室内に搬入した。11月10日から最低気温5℃になるように加温した。

3 試験結果及び考察

○ 試験①

発根は、さし木後30日では全く見られず、45日後以降、発根個体率、発根数、根重が急速に増加した。次に、鉢上

げ後の枯死個体の発生状況を見ると、さし木後45日以降のものは、ほとんど発生がなかったが、30日区では約25%の発生となった。なお、未発根個体でも鉢上げ後、発根し活着することが判明した。

クラウンの形成率は、45日置床区が最も高く、さし木1年後の生育も優れており、さし木の置床期間として45日位が適当であると考えられる。しかし、発根量とクラウン形成率との関係は明らかでなかった。

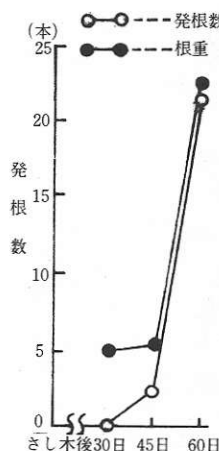


図1 発根量の推移

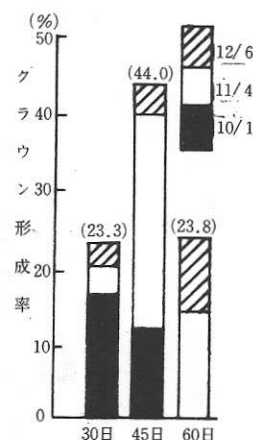


図2 置床期間とクラウン形成率

○ 試験②

クラウンの形成経過を見ると、4月ざし(早期ざし)では、さし木後3カ月から5カ月(8月～10月)、6月ざし(晚期ざし)では、さし木後4カ月～6カ月(9月～12月)にかけて形成されることが知られた。

さし木後12カ月の生育状況を見ると、地上部生育では、6月ざしに比べ、4月ざしで草丈、葉数が勝り、葉も大きくなる傾向となった。

地下部生育を見ると、根数は6月ざしで多く、根径は4月ざしで勝っていたが、塊根重はほとんど差がなかった。また、新芽の発生は4月ざしで早く行われる傾向がみられ

た。

養成苗のさし木1年後の形態は、図4に示すように、茎数は1〜3本となり、本年度伸長茎の基部に側枝を発生する場合がある。また、塊根部のすぐ上の鱗状葉(仮称)の基部に次年度の芽が1〜4個形成される。一方、塊根はさし穂の葉柄の基部に多く着生する。

さし木16ヵ月後の塊根収量をみると、個体差はみられるが、塊根重で約90g、塊根数約11本、芽数で2.7個となり、さし木後16ヵ月間の養成で、十分販売株となりうるものと考えられる。

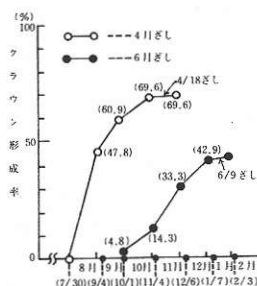


図3 クラウンの形成経過

表1 生育調査(1年後)

(S. 56 5. 13調査)

部位 項目 区分	地上部生育				地下部生育				
	草丈 (cm)	葉数(枚)		生体重 (g)	塊根数(本)		最大根径 (cm)	塊根重 (g)	芽数 (次年度) (個)
		完全葉	不完全葉		φ2mm>	φ2mm<			
4月さし (4/18)	21.7※	5.3	2.3	24.0	10.3	6.7	0.65	27.0	3.0
6月さし (6/9)	19.8	4.7	1.3	24.3	9.0	21.0	0.36	26.0	1.7

※ 草丈は蕾の位置までとする。

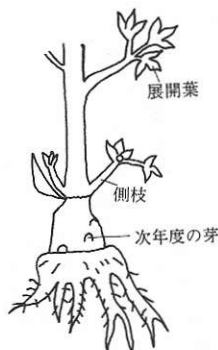


図4 養成苗の形態(さし木1年後)
(S. 56. 5. 13調査)

4 ま と め

シャクヤクのさし木繁殖株の増殖経過をみると、発根量及び発根個体率は、さし木後45日頃から急速に増加することが判った。また、クラウンの形成からみたさし木の置床期間としては、45日位が適当であると思われた。

クラウンは、4月さし(早期さし)で3ヵ月から5ヵ月、

表2 養成苗の塊根収量調査

(調査月日 S. 55. 10. 23)

項目	前茎 年立 本年度数 (本)	塊 根 重 (g)	塊 根 本 数 (本)	最大 根 径 (cm)	芽 数 (個)
最大値	3.0	138.0	16.0	1.52	4.0
最小値	1.0	38.0	7.0	0.71	1.0
平均値	1.7	91.8	11.6	1.22	2.7

塊根重: 91.8 ± 30.6 (33.3) %

塊根本数: 11.6 ± 3.1 (26.5) %

注. さし木時期 — 昭和54年6月20日, 鉢栽培(5号鉢), 11月12日から最低気温10℃加温。

6月さし(晚期さし)で4ヵ月から6ヵ月にかけて形成されることが明らかとなった。

さし木繁殖株は、さし木後約16ヵ月の養成期間で、十分販売株となりうるものと考えられるが、今後、さらに養成方法並びに増殖株の利用方法について検討する必要がある。